

第1回立正地理教養セミナー

「多様な世界と新しい観光 - 21世紀における『八十日間世界一周』 - 」実施報告

片柳 勉* 小松 陽介*

キーワード：地理、観光、アンケート、世界

1. はじめに

立正大学地球環境科学部地理学科では、地理学の研究成果を地域社会に還元する取組みの一環として、新たに公開講座「立正地理教養セミナー」を企画した。2006年度の第1回セミナーでは、受講者に世界各地の自然や文化の多様性を認識・理解してもらうことを主目的として観光に焦点を当てた。その主な理由は次の3点である。2005年における日本の海外旅行者数は1700万人を超え、現代において観光が大きな社会現象となっていること。従来のパッケージツアーに飽き足らなくなった旅行者が、エコツアーや海外ロングステイなどの新しい観光形態を求めていること。そうしたなか、自然環境や景観に関する研究蓄積の多い地理学が、新たな旅の楽しみ方を提供できるとの考えである。

本セミナーのサブ・タイトルに掲げた『八十日間世界一周』は、フランスのSF作家ジュール・ヴェルヌが1873年に著した小説である。ヴェルヌの小説には代表作『地底旅行』『海底二万里』をはじめとして空想科学物に分類される作品が多いが、『八十日間世界一周』は当時の旅行記やガイドブックを参考にして書かれた冒険小説であることはよく知られている。したがって、この小説には19世紀後半における世界の様子が克明に描かれている。この小説が出版されてから130年余りが経ち、世界はグローバル化の波のなかで画一化が進んだようにも見える。しかし一方で、異なる自然環境のもとで花開いた独自の文化が世界各地で見られるのも事実である。この自然や文化の多様性に満ちた世界を認識・理解することが、「新しい観光」の大きな目的の一つである。一種の観光ガイドブックともいえるこの小説をセミナーの導入部で取り上げ、「80日間で世界を一周しながら、多様な世界を観光する」というテーマで連続講演を行うことで、受講者は興味を持って参加し、地理と観光に対する固定観念を変えてくれるものと考えた。

2. セミナーの実施と参加者数

今回のセミナーは地理学科の10名の教員が担当し、隔週土曜日の全5日間で各回2本の講演を実施した(表1)。全10本の講演では、各教員が自然・文化・経済などの専門分野を切り口に世界の風景を語るものとし、その際に地理学の魅力を「多様な世界」「観光」をキーワードとして分かりやすく伝えることを目指した。取り上げた地域は、西ヨーロッパ、南・東南アジア、中国、日本、北アメリカと広範囲にわたり、小説『八十日間世界一周』の中で主人公らがたどった道をなぞりながら講演を進めていった。

受講状況についてみると、各回とも40名を超える参加申込があったが、実際の参加者数は、第1回22名(内4名が内部関係者)、第2回18名(同4名)、第3回20名(同2名)、第4回17名(同6名)、第5回17名(同5名)であった。今回のセミナーでは、参加申込者数と実際の参加者数に2倍以上の開きがあり、参加申込者にいかに当日会場まで足を運んでもらうかが今後の課題として残った。

3. アンケートの実施と目的

講演会の最終回となる第5回講演終了後に、参加者に対してアンケート調査を行った。このアンケートは、今回の教養セミナーの内容やレベルが受講者のニーズに合っているかを確認し、来年度以降に開催する教養セミナーの検討材料とすることを目的としている。しかし、第5回講演会に参加しなかった受講者の意見は反映されていないため、場合によっては第1回から第4回まで参加した受講者もいること点に留意すべきである。アンケート有効回答数は18人である。設問を大別すると、参加者情報、参加の動機、講演内容・満足度時間、希望する講演内容、総括、立正大学地理学科の認知の6項目である。

* 立正大学地球環境科学部

表1 実施内容

1. テーマ	多様な世界と新しい観光 21世紀における『八十日間世界一周』
2. 主催	立正大学地球環境科学部地理学科
3. 後援	立正地理学会
4. 対象	市民 (地理・旅行に関心がある成人層)
5. 定員	40名
6. 日程	2006年度前期 隔週土曜日 (13時30分から16時00分) 全5回、各回講演60分×2、 途中休憩15分、交流時間15分
第1回	5月27日(土) 挨拶：19世紀の世界認識と観光 (片柳 勉) 物語に描かれたイギリスの自然 (島津 弘) イタリアの食文化と観光 (長坂政信)
第2回	6月10日(土) スリランカの風土と文化 (大塚昌利) バリ文化と自然環境 (原 美登里)
第3回	6月24日(土) 長江流域の自然と文化 (内山幸久) アメリカ西海岸の気候と地形 (小松陽介)
第4回	7月9日(日) アメリカ合衆国の都市の素顔 (鈴木厚志) アメリカ合衆国の自然と国立公園 (澤田裕之)
第5回	7月22日(土) 19世紀日本の保養地の風景 (岡村 治) イギリスにおける歴史遺産観光 (片柳 勉) 総括：多様な世界と新しい観光 (片柳 勉)

表2 参加者の年齢および性別

	男性	女性	計
20代	1	4	5
30代	1		1
40代	1		1
50代	2	5	7
60代	1	1	2
70代	2		2
計	8	10	18

以下、順に分析結果をまとめる。

4. アンケート集計結果

4-1. 参加者情報

20歳代から70歳代までの幅広い世代が受講しているが、比較的高齢の参加者が目立った (表2)。特に50歳代が全体の40%近く (7人) を占めている。60歳代以上の高齢者は4人であり、全回を通じた印象とも合致する。その反面、30 - 40歳代の参加者は2名と少なく、10歳代の参加者はなかった。男女比は8対10と若干女性の参加が

多く、50歳代と20歳代でその傾向が強い。

参加者の職業は会社員が6人と最も多く全体の3分の1を占め、立正大生以外の20歳代の参加者は2人であった。「その他」(6人)の回答には無職も含まれている。一方「その他」の中には主婦と回答する50歳代の参加者も2名いたので、次回のアンケートでは選択肢の一つに加えるべきである。また、自営、公務員、教員、その他の学生が1名ずつ、高校生の参加はなかった。幅広い層に聴講されたことは評価できるが、教員や高校生の参加を増加させる方策を次回開催までに考えなければならぬだろう。

熊谷市内在住の参加者が9名と半数を占めるため、地域への還元活動の立場からは今回の教養セミナーの開催は効果的であると考えられる。さらに市町村合併以前の行政界別にみると、9名中7名が旧熊谷市、1名が大里町、1名は不明であった。一方で行田市から2名が参加したものの、江南町（当時は熊谷市と合併前）、深谷市、鴻巣市、東松山市からは参加者がいない。このような結果から、近隣市町村への広報活動も見直すべきである。しかし、春日部市と上尾市から2名、さいたま市、所沢市、その他県内より各1名が参加していることから、交通の便が悪くなければ、県内各地からの参加者が見込めるのではないだろうか。

4 - 2. 参加の動機

今回の教養セミナーに参加する上で、どのような媒体を通じて開催情報を入手したかを質問した結果、「知人」を通じて情報を得た参加者が5名にのぼり、中には本学部教員に教えてもらった人もいた（図1）。「チラシ」「新聞」を通して知った人は各5名であり、「大学のホームページ」と回答した人はわずか1名であった。このような状況から、新聞広告やチラシなどの古くからある宣伝方法は、まだまだ重要であると言える。一方でインターネットから情報を得る人が少ない理由としては、高齢者の参加者が多いためではないか。ただし筆者の一人が第3回講演中に尋ねた所、PCを所有しインターネット閲覧が可能な参加者は半数以上いた。しかし、今回のような新規イベントでもっとも効果的な宣伝方法は口コミであった。教養セミナーを毎年繰り返し実施することで認知度は高まると考えられるが、最初の1、2年は口コミの影響を無視することはできない。そういったことから、次回開催時には、今回の参加者の知人にも参加を促してもらうよう、考慮すべきではないだろうか。参加しようと思った理由については、「内容に興味があったから」

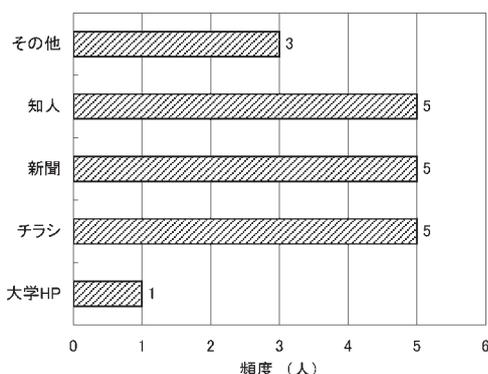


図1 今回のセミナー開催を知った媒体

が最多の14人で、「大学の公開講座だから」と回答した人も2名いた。

4 - 3. 教養セミナーの内容・満足度

全5回のセミナーうち一人あたりの平均参加回数は2.7回であった。セミナーに対する満足度については、「満足」「やや満足」がそれぞれ8、9名で、合わせて17名が満足したと回答していることから、この点では十分な結果であるといえる（図2）。満足度とは別にセミナー内容の理解度をたずねると、「理解できた」「ほぼ理解できた」と回答した人は合わせて17人にのぼり、内容を理解させることについても十分な結果であると言える。しかし、講演のレベルが易しすぎて物足りないという場合には、高い理解度は必ずしも良い結果であるとは言えない。そこで、次項目で難易度についても質問すると、「ちょうど良い」と答えた人が9人と最も多く、「やや易しい」「やや難しい」が4人、3人と、対称形の分布を示した。したがって今回の参加者に対しては、講演内容のレベルが適切であったと考えられる。一方、「易しい」と回答した人が3名に対し、「難しい」と回答した人がいない点は、もう少しレベルを高めても良い判断材料となる。

今回のセミナーは2名の講師が1時間ずつ講演を行った。この時間について、「今のままでよい」と回答した人が11人と最多で、次いで「やや短い」と回答した人が5名であった。このことから時間についても適切であったと考えられる。連続して2時間の講演があると集中力が途切れる可能性もあるが、講演者の交代時に小休憩をとったことも効果的であっただろう。

これらのアンケート結果は、参加者の年齢と深いかわりがあることがわかった。60歳代4人の平均参加回数は3.3回と、全体の平均値である2.7回を上回った。また、講演時間について「短い」「やや短い」と回答した人の

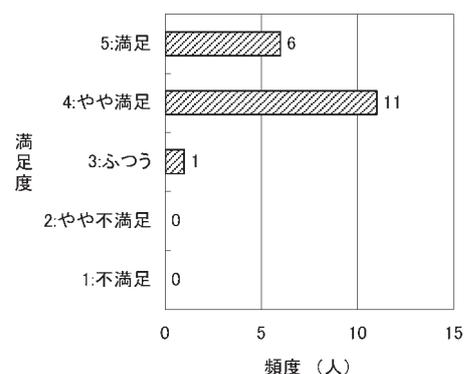


図2 セミナーに対する満足度

割合が75%と高く、とくに60歳代でそのような意見が多く聞かれた。しかし世代が若くなるにしたがって講演時間が「ちょうど良い」から「やや長い」と感じるように変化している。以上の点から考えると、高齢者の理解度や集中力は、若年層に比べて高く、2時間の講演にも集中して聴講できる精神力やモチベーションを有していると判断できる。

初回到資料をまとめて配布したが、講演者によっては地図や論文の抜き刷りなどを当日に追加配布することもあった。そのため配布資料の量については「適切である」と答えた人が11人と最多であり、特に問題はないようであった。

4 - 4. 今後希望する講演内容について

今回の教養セミナーが熊谷キャンパスで開催された場合においても「参加する」と回答した人は12人、「参加しない」と回答した人は6人であり、参加率が約30%減少する可能性がある。もし今後熊谷キャンパスで同様のセミナーを開催する場合には、バス運賃の無料券を配布することなど、何らかの付加価値をつける必要性も考慮すべきである。しかし、このアンケート結果は熊谷駅前で開催したセミナー参加者を対象としているため、参加しなかった住民、たとえば東松山市や旧江南町在住者の中には自家用車で参加希望者も潜在的には存在するだろう。また、「参加しない」と回答した参加者の居住地の内訳は、行田市2名、熊谷市2名、さいたま市1名、春日部市1名と、高崎線沿線に集中していることがわか

る。したがって、東武東上線の駅前や熊谷キャンパスなどで開催した場合、参加者の居住地の分布は大きく変化することも予想される。いずれにしても、地元である熊谷市での開催で、もっと多くの人数を集められるようであれば、他の地域でのセミナー開催は必ずしも成功しないであろう。

「今後このような教養セミナーに参加したいか」という問いに対しては、1名の無記入を除き、「ぜひ参加したい」「参加したい」という回答を得た。これまでに述べたようにいくつかの問題を抱えているものの、総合的に見ると今回の教養セミナーに対する反応が良好であったことを示している。また、「どのような内容の講演なら参加するか」という設問(複数回答可)に対しては、全体的に見ると際立った特徴はみられない(図3)。しいて言えば、日本に関する事項(のべ28人)よりも外国(のべ34人)に関する事項に関心が若干高く、また、都市、自然、歴史、観光などの分野に興味を示していることも読み取れる。一方でGISに関しては知名度の低さからか、希望者は4名にとどまった。また、地理の得意分野であり、重要な手法の一つでもあるフィールドワークについては、「野外観察」という用語を用いて質問したが、希望者は5名にとどまった。

これらの設問に対しては、年齢別に傾向が顕在化した項目がいくつかあった。前述したアンケート結果から、セミナーに対して比較的関心が高いと考えられる60歳以上の参加者は、野外観察希望者は皆無であった。これは今後検討しなければならない課題となる。また、同じ

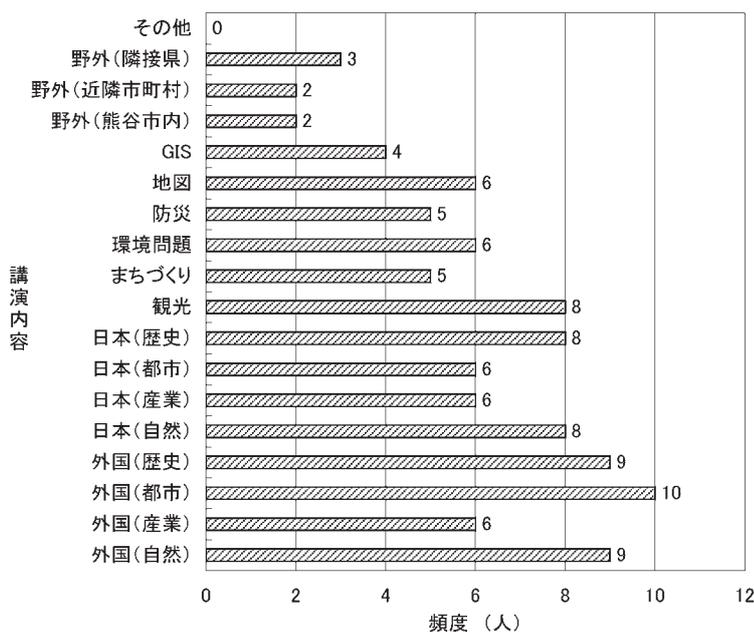


図3 今後希望する講演内容(複数回答可)

60歳以上の世代における「興味のある分野」は自然、歴史、観光、地図などの「教養的要素」に集中している。一方で、まちづくり、防災、環境問題といった「地域づくり」に活用するための内容に対してほとんど反応が無い。高齢者の生涯学習に対する意欲は、その学習内容を活かすことよりも自己の知的好奇心を満足させることに主眼を置いているのではないだろうか。

「興味のある分野」については複数回答を認めているので、一人あたりのチェック項目数とセミナーへの参加回数を見ると、参加回数が多い人ほどより多くの項目にチェックしている傾向が見られた。たとえば、全5回のセミナーのうち4回または5回参加した人の平均チェック数はそれぞれ6.0個、4.7個である。それに対して参加回数が1～3回の人は平均3.0個と少ない。地理に対して関心が高い人ほど参加回数が多いとも考えられるが、教養セミナーへの参加を重ねるうちに地理に対する関心をより深めるようになり、そしてさらなる幅広い知識欲を有するようになったのかもしれない。そういった視点に立てば、教養セミナーの開催は単発とせず、4～5回程度連続して行うことが効果的であると推察される。

4 - 5. アンケート結果の総括

さて、本教養セミナー開催の目的として、「地理学」に対する関心や興味、学問的意義の認知向上を考えていたが、その効果はどうであろうか。「地理・観光に対する意識は変わったと思いますか」という質問に対し、半数を超える10人が「変わった」と回答している。参加する以前より地理に対する造詣が深い人が含まれている可能性を考えると、地理や観光に対する新しい視点を提供するという当初の目的の達成度は、及第点をつけられるのではないだろうか。

また、参加回数別にみると、参加回数が1回または2回の人では、いずれも意識は「変わらない」という回答

が半数を超えた。一方で、3～5回と重ねて参加した人は意識が「変わった」と回答した人がいずれも半数以上を占めている。この結果からも、複数回のセミナーを連続して実施することが重要であることを示唆している。

最後に、「立正大学地理学科を知っていましたか」という、学科の知名度に対する設問を設けた。その結果、「知っていた」と回答した参加者は実に17人に上った。この結果をそのまま受け取るべきか判断しかねるが、場合によっては今回のセミナーのチラシで地理学科のことを知ったという人も含まれている可能性があるが、地元における認知度は高いと言える。次回以降アンケートをする際には注意すべきである。

5. まとめ

今回のセミナーの参加者は、熊谷市近隣市町村からの参加者が少なく、年齢層は比較的高齢者が多かった。宣伝方法としては新聞やチラシ、口コミが重要であった。セミナーの内容・レベルについてはほぼ適切で、満足度・理解度・難易度ともに良好な結果を得た。特に高齢者については参加意欲が高く理解度も高い傾向があるが、野外観察は敬遠されている。参加回数が多い人はモチベーションが高いだけでなく、地理や観光に対するイメージが変わったと回答する比率が高く、地理学の普及のためには単発ではなく連続講座が効果的であるといえそう。

今回の教養セミナーでは企画から実施するまでの時間が短く、全講演者がセミナーのテーマを十分に理解するまでにいたらなかった。そのため、講演内容に統一性を欠いていたことは否めない。しかし、受講者に世界各地の自然や文化の多様性を再認識して新たな観光の楽しみ方を知ってもらうこと、さらには地理学の研究成果を地域社会に還元するという点において、今回のセミナーは多少なりとも貢献できたものと主催者側は考えている。

The Report of “Variety of the World and New Tourism - Around the World in Eighty Days - in 21th Century”, Cultural Seminar on Geography, Rissho University

Tsutomu KATAYANAGI*, Yosuke KOMATSU*

*Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Keywords: geography, tourism, questionnaire, world